

来迎思想史上に於ける問題点

千　　賀　　真　　順

一、

来迎思想は仏教に基調して印度・中国・日本の仏教史上に著録されていることは周知の史実である。特に日本に於ける来迎思想は中世の数百年間にブームを捲き起しているが、幾多の問題点を持つてゐるやうである。しかも多くの論文、書刊に見逃されている点があるように思念するので問題点を列举的に叙べて見たい。従つて考証の資料等は煩を避け割愛するが仏大研究紀要才三十六号に拙稿を載せたので併せ参考されれば幸甚に思ひます。

来迎とは仏・菩薩が修道者の臨終に此の世に來現し行者を迎へて仏の世界に引き導くことと言ふまでもない。特に彌陀如来が念佛者の臨終に聖衆と共に来迎引接されると云ふことは周知の史実である。人生の生・老・病・死の苦悩の存する限り臨終が重要視されることは大智度論（大正発・二十五卷・二三八頁）等の言を待つまでもない。来迎を以て臨終に内期を規定したことは經典作者の卓見と言はれる。（印度学・仏教学研究紀要才七一）仏教徒は印度以來臨終の作法を行い、祇園の辺に無常院を立て、特種の儀礼を行うたと史録されている。（四分律行事鈔卷下の四・）この儀礼は中国・日本へと伝承し源信の往生要集（中卷末）、或は浄土宗等の儀礼亦これに基いてゐる。

来迎の意義特に仏の不来に關しては懷感の浄土群疑論才二卷（浄全六卷二〇頁）問答して仏敎学的見地より詳細に解明しているので今は省略する。

二、

浄土三經即ち大經才十九願に聖衆来現の願があり、下卷の三輩段、觀經に九品来迎の文、彌陀經に臨終来現の經文が注意される。この三經の来迎に關する經文に問題点がある。即ち大經・小經の所謂来迎の文とするものは実は来現思想は表はしたもの、正しく具体的に来迎思想を説くのは唯觀經と言ふべきものと云う。觀經の九品往生説は後の来迎思想展開の根柢となつたものであり、この九品往生説によつて在家者の救済来迎まで明になつたことは注意すべき点であると思ふ。中国、特に日本に於て最も昂揚された来迎思想は觀經によつて斯くなつたと断言し得る程である。そこに觀經の持つ偉大な宗教的意義が注目されなくてはならない。學者の論作を通覽すると著しく指摘が乏しいように思はれる。觀經為宗は来迎思想を論ずる才一の問題点である。来迎思想は觀經一經による、觀經一部は来迎芸術經である。

三、

印度に於ては無常院創立、従て臨終儀礼は行われたと首肯される。併しそれは人生の死に対する自然的願望より臨終正念を重視したもので、後世の特に日本の中世に見られる澎湃たる来迎ブームには到底比較されない。併し浄土三經・法華經・華嚴經・文殊師利発願經・梁訳撰大乘論釈等に臨終見仏願求を叙べているから、人間の危機としても臨終来迎を肯定し得る。この場合後は世に於けるが如くでなく来迎と言ふより恐らく臨終来現の護念思想と言ふべきものと思ふ。

中国に於ては何時頃から来迎思想が興起したかは明確ではない。僧顯・慧永・曇鸞・道綽・善導（僧伝）等何れも来迎を願求したと伝えるが興隆は浄土変相の製作並に流伝に起因するものである。来迎思想を説く場合に必ず引用される十往生阿彌陀仏国經（正統一・八七・四）は内容より善導以前、即ち六朝時代の所産と思われる。本經には二十五菩薩の護持とその菩薩名を出しているのみである。善導が「觀念法門」（浄全四卷・二二七頁）に臨終正念訣（同上七九七頁）等に更に有名な發願文に臨終正念を希念し、特に浄土変相三百鋪を作り（瑞応伝・新修往生伝）、則天武后が浄土変を数百幅造作したと伝えるからと言つて相当盛んに来迎思想が行われたか否かは早急に断言し得ない。総じて遺品も少く（望月信亮氏論文）近年、ソ連・仏・英の探險隊が西域に於て所謂来迎図を発見したと特筆されているが日本のそれに比すると余りにも低調と言える。併し唐・宋・元に涉つて相当の来迎図が作られたことより推察すると印度に遺作の殆んどないことに對比すると一段の展開があつたと考えられる。

四、

日本に於ける来迎思想には問題点を多く発見する。即ち六世紀後半より中国・朝鮮・日本と彌陀信仰が伝承され、無量寿經の宮講（日本書紀）に始まつて人心の窮極の不安を除くため次第に来迎思想が一般化して来た。早く推古朝より天寿国曼荼羅（異説はあり）を初めとし彌陀像や浄土変相が作られ特に觀經所説により浄土変相（当麻曼荼羅）下縁の九品往生の相が脱化して独立した迎接変相として盛んに製作されるようになった。遺作より推して藤原時代十世紀より上り難いが、その原図は恐らく唐画に源流を求むべきものと思われる。（証空の曼荼羅註記・望月信亮氏も論明を重ねる）。こゝに注意すべきことは源信（九四二—一〇一七）を

契機とする以前と源信以后とに於て劃期的な飛躍をなしていることである。源信以前は単なる人心の不安に伴う極く自然の宗教的欲求としての来迎思想であつたが源信以后は道緯——源信——法然と伝承される末法時代觀（一、〇五三）に依る仏教危機説に基く時代惡の苦惱による深刻さ（諸往生伝・諸文学作品・諸日記等に刻明される）を加へて来迎思想が高揚された点である。即ち時代の所産たる往生要集がその重要な意義を顕はしている。常行三昧修道の道場及び彌陀仏像が作られ、次才に九品・淨土變相・来迎図（九品来迎図・彌陀二十五菩薩来迎図・三尊来迎図・一尊来迎図・山越来迎図・還来来迎図・遣迎図等）が造立されて来た。平安中期より鎌倉時代に涉つて盛行したが特に平安中期以后信仰の主尊的地位を占めた来迎引接の願望は往生要集に負うところが多い。即ち本書は觀經の所説に基て構成され、濁世末代と云う自覺、破戒無慚の凡夫性に立脚した聖道仏教の危機説に基く淨土教信仰書として香りが高い。特に本書の厭離穢土・欣求淨土の二門は鮮かな対照表現であり、人々をして泌々厭欣の情を抱懷せしめずにはおかない。厭離穢土の相を説くに六道・八大地獄を微細に叙述して人間生涯の苦・無常を指摘している。その説くところと現実の深刻なる社会相の凝視による未來の恐るべき結果への想到を契機として一転して欣求淨土の救済を十樂に依つて説き示している。この十樂中、聖衆来迎樂、引接結緣樂、中卷下の臨終行儀と相關連して来迎思想を強く鼓吹している。聖衆来迎樂こそは当時の人々に唯一の生きる力となつた福音とも云うべきで迎講・念仏講・来迎図の創始及び造立となり、臨終に仏が聖衆と共に来迎するとの信仰が世人に喜び迎へられたのは想像以上のものであつたと思はれる。来迎芸術は淨土教美術の主体をなして盛んになつた。来迎図の二十五菩薩は十往生經に名を挙げ行者を来護することを説くが二十五の数は源信の創始した

念仏講の規約である二十五三昧起講より出で二十五三昧を修して三界二十五有に迷う衆生を救済する菩薩とがたまたま二十五の数字の混交となつたものであらう。二十五菩薩来迎の思想は源信の頃萌芽したようである。又彌陀来迎像を図繪したことはその別伝等にある。（法華驗記・後拾遺往生伝巻中）かの著明な高野山所蔵来迎図は構想雄大、来迎の劇的描写、優雅典麗の名画として源信作と伝へる十一世紀の秀逸である。以后藤原末期十二世紀より鎌倉時代十三、四世紀に涉つて空前の来迎図が各種作られ、平等院鳳凰堂壁扉の九品来迎図（一〇五三）を最古のものとして夥しき数量に及んでいる。如何に来迎思想が盛運であつたかを彷彿せしめる。

五、

法然上人以前に於ける来迎芸術並に来迎思想の史実は余りに秀麗にして優美であつたに目を奪はれ易いがこゝに注意点がある。即ち「往生極樂記」等の諸往生伝並に諸記録に伝録されてゐるところを吟味すると、「妻子を捨てる」、「家職を離れる」、「社会に背離する」と云う現実の人間の条件を無視した非人間・社会的史実を多く発見する、これは憂うべき事態である。それが唯臨終のため、来迎のために人間的一切の生活を抹殺してゐることは注意すべきである。そのために日々幾万の念仏を申すと云う数量念仏・苦行念仏が励精され、宛も現実人生を忘れて念仏行のコンクールをすると云うことになつた。（仏大研究紀要才三十六号拙稿）法然上人の本願念仏はこれを革新するものであつた。

六、

法然上人はその人格、徳行の示すように、素直に伝承を重んぜられ、而も聖光上人の讃仰されてゐるやうに聖浄兼学の人にしてよく元祖の念仏義を發揮し得る（徹選撰上・浄全七巻八八頁）

とあるように、人生に於ける嚴肅なる事実である死に対して印度以来の来迎思想を特に仏の本願意によつて領受され、而も平生念仏を主眼として一念々々に如来の本願慈悲を味得し、人生の苦悩のまゝに念仏の中に光摂化育を体得しつゝ正念来迎を希求された。（逆修說法・選択集・法語等に仏の三業と衆生の三業の値遇一如を屢説される）又法然上人の教説に依て影響したと思はれるのが来迎の姿態である。初めには多く坐形で画かれ行進もゆるやかであつたのが、次才に速度を増し、跪坐より立姿となり行進速度も早く動的な仏の救済を極く明確に現はしている。その代表的のものが知恩院本の早来迎である。觀經才七觀の三尊の空中住立、才十三觀の丈六立像より「逆修誦法」に「仏像は来迎の形像を造るべきなり」（法全二六九頁）と言はれる。これは宗義に明す仏と衆生の三業相捨離しない故に動的な特色を表はしているもので法然上人は平生に光摂化育されて臨終に及ぶ念仏者の常住なる擁護者であるべきことを説き示されている。法然上人以前の念仏と全く特質を異にする選択本願念仏であり、来迎思想も本然の姿に於て承明されている点注意を要する。

七、

親鸞上人は平生業成・不来迎を宗義の立前とする。即ち万行円満の名号を聞信する一念に往生の業事成升すると云う。従て来迎を期待するのは自力諸行の機であり教であるとする。「教行信証」才六に才十九願を臨終現前の方便願とし「末燈鈔」等に繰返し、特に存覚は「浄土真要鈔」本に多くの問答を掲げて御一流は平生業成にして来迎の儀に執せず」（大正蔵八十三卷七五九頁）としその文証として才十八願並にその成就文に求めて論明している。蓮如亦随所に之を伝弘されている。これは一念信解に立脚しているから平生業成・不来迎を宗義とする立前

は首肯される。併し人間の条件を考慮するとき真宗の教説は素直とは云えない。故に近代の学匠達（真宗論題集等）は種々に会通している。又信徒は臨終仏を掲げて臨終をいのる風習がある、当り前のことである。その詳細は省略する。

八、

要するに仏教思想史に於ける来迎思想は注意すべきものがあり、特に観經によつて展開したこと、又日本に於ては源信を契機として急速に高揚され長く国民の根強い習俗となり、末法時代觀に基調して未曾有の展開し、秀逸なる浄土来迎を所産して美術史上注目されている。併し問題点はある。幸にして法然上人に至つて平生念仏・臨終来迎の素直な組織となり、親鸞上人の平生業成不来迎宗義の特異な主張を見たが、人間の心の末法觀に相応して永遠なるものであつて仏教徒は等しく靜かに願望すべき宗教的情想であらう。